

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 112 号

平成 23 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より（3）
（歴史編の著者は、藤田昌直小石川白山教会牧師）

祈り狂い狂い祈りつつ

1946 年 6 月に、ミス・モークはアメリカに帰ってから、アメリカではたいへんな歓迎を受けた。...後日、何かの拍子に、「私は王さまのように迎えられた」と洩らしたことがあった。

1947 年（昭和 22 年）8 月 28 日（木）ミス・モークは 1 年 2 カ月ぶりで日本に帰ってきた。...

ミス・モークは、今回は、東京目白のドクター・メーヤー夫妻のいる宣教師館に落ちついた。久し振りで見るミス・モークは、やはり、1 年間の故国での休暇のため（実際は、各地をへめぐっての講演旅行であったが）、健康を全く回復し、見るからに元気になっていた。...

ミス・モークの留守中は、小石川白山教会としては、まだ、会堂をもたなかったもので、人々を集めての伝道は思うにまかせぬものがあった。それもあって、（藤田）牧師は主として自ら出て行って伝道した。例えば、朝日生命本社へ、運輸省、国鉄、浅上荷役（今日の浅上運輸・倉庫）等へ出かけて職場聖書研究会を開いた。集会は週 1 回、正午から 1 時間、ないしは終業後 1 時間という風であった。石館邸の集会は、40 名から 50 名であったが、こういう職場との連がりから

いえば非常に多くの人々に福音が伝えられたわけである。ミス・モークは、筆者からこれらの事情を聞き、ことのほか喜び、自分も運輸省・国鉄には進んで出かけて福音を語るようになった。...

ミス・モークは、とにかく積極的伝道が好きであった。あらゆる機会は神のものであると信じていた。少し手を広げすぎはしないかとのそしりもなくはなかったが、あえて大胆に筆者を励ましたものである。ミス・モークが祈りの人であったことに間違いない。しかし彼女の祈りは、ほのかな炎を発する祈りでなく静かな祈りであるが灼熱に燃え、ダイナミックな働きを生む祈りであった。

ミスモークの戦後來日は、1947年8月28日であったが、その31日(日)には、石館邸の小石川白山教会は歓迎会を開いて74名の集会であったが、その時、「すべてを捨てて」(“Leave All”)と題しての話の中で、「わたくしは私の家族、すなわち兄弟姉妹を捨ててここに来ています。ところがミス・ヴァーナ・ハツラー宣教師の母上は91歳ですが私にこう言いました。『ヴァーナが、涙なんか流さないで、ほほえみをもって日本に帰って行くように、ミッション・ボードを促してください』と」こういう意気ごみが古い宣教師精神というものである。だから、することなすこと進撃的であったし、それを好んだ。...

小石川白山教会は、この年(1947年)12月1日、石館邸より旧敷地に建ったクオンセット・ハット(かまぼこ型の兵舎用の仮設建物)へ引っ越した。...日本中、どこの教会も、この時代は教会に人が増加した時である。小石川白山でも5月16日の記録を見ると、出席者183名で、20名の人バプテスマを受け、3名が信仰告白による入会をなし、2名の転入会者があった。こういう有様なので、小さいクオンセット・ハットでは、毎日曜、文字どおり立錫の余地なく、通路に座り、説教者の足元に座り、会衆の見えない隣室に座り、それでもなお外に溢れるという状態になってきた。ある人は、いくら戦後での状態としてもこれでよいかと批判的であった。しかし、ミス・モークはこれでよいと確く信じて牧師を励ました。

溢れる油壺

ここで、暫く、小石川白山教会とミス・モークとの関係の物語りを離れて、ミス・モークと本所緑星教会、板橋教会、高円寺東教会、そしてさらには早稲田教会のことを記載しなければならない。

小西芳之助の名は、ミス・モークの初期の働きの中で既に出ている名である。彼は東大を卒業後、安田信託株式会社に入ったが累進して、1947年頃には傍系の会社の取締役になっていた。しかるところ、1946年5月妻ふじのを天に召され、親友広野を戦災で失う等の中で、深く感ずるところから、献身を決意し、ミス・モークに相談した。ミス・モークは、神がこういう御声をかけ給うたことを感謝し大いに激励した。しかし、彼は未だ、教団よりの資格を得ていなかったため、ドクター・メーヤーを本所緑星教会の主管者・主任担任教師として立て、その下において伝道牧会に従事した。本所緑星教会は、次第に参集する旧会員及び新会員とともに、小西芳之助を立て広野捨二郎のとむらい合戦のような気持ちで、戦後の激しい戦いをした。ミス・モークは、この聖戦の中に、当然、身を投じ、毎日曜夜はバイブル・クラスを開いた。小西はその通訳をした。しかるところ、深い神の御旨により、1949年3月、杉並区高円寺の石館邸内に、日本基督教団高円寺東教会を自ら開くこととなって本所緑星教会を辞した。

ミス・モークが小西とともに本所緑星教会の伝道にたずさわったことは、彼女にとってまことに感動であった。そこには古くからの会員の歯科医入江義次とその家族がおり、広野薫未亡人とその家族がいたからである。入江は次男を、広野は夫とその長男を失っている。本所緑星には、その他家族を戦災で失った人々が多かった。ミス・モークは、日曜の午後から出かけて行って、それらの人々を慰めた。そして広野の親友の小西が牧会者であるというので、ミス・モークの力の入れ方もひとしおであった。

(1949年小西が高円寺東教会を始めたあとも)ミス・モークは、困難の中を相変わらず、毎日曜の午後から夜にかけて、本所緑星教会の伝

道に協力した。ミス・モークは、そのバイブル・クラスにおいて、この時、主としてヨハネ黙示録の講義をした。(1949年、1950年の頃である。)入江義伸は小西が高円寺に移ったのち、ミス・モークの通訳をしていたが、深く神の召命を感じ、1950年11月、聖なる決断をして神の召命に応え伝道者を志さずに至った。1年の後、板橋に伝道所を開設した。1951年11月である。...入江は4年間、ここで働き、1956年12月11日からは本所緑星教会の専任の主任担任教師となった。

小西芳之助は1957年11月、東京聖經女学院卒業の阿部美江と再婚し、現在なお、高円寺東教会の牧師である。

早稲田教会とミス・モークの関係は、同教会の主任担任教師篠崎茂穂が、ミス・モーク・バイブル・クラスの古いメンバーである。篠崎も、戦後、大いに感ずるところあり、伝道牧会に身を投じ、今日すぐれた働らき人となっている。ミス・モークの喜びは尽きるところを知らない有様であった。...

1949年11月27日(日)ミス・モーク来朝35周年記念講演会が午後開かれた。場所は小石川白山教会、午後6時30分より9時30分まで、司会は石館守三、講演者は、小西芳之助、篠崎茂穂、藤田昌直の3名であった。講演題は以下の如くであった。小西は「モーク先生の思い出」、篠崎は「モーク先生の生活」、藤田は「モーク先生の思想と神学」であった。...ミスモークは、午後の集まりで黙々と弟子たちの語るところに耳を傾けていた。...ミス・モークは、あたかも溢れる油壺のように、1949年を過ごした。...

1951年(昭和26年)は、6月10日(日)小石川白山教会本会堂建築落成献堂式が行なわれた。...7月9日、メーヤー夫人、メッサシュミット夫人、ゲーヤー夫人を招き、感謝会を開いた。ミス・モークは、こういう時には、いつも全会衆をなごやかにとりもつ役目を果たした。そのすぐれた英知は、まさに天賦のものであった。この年は、9月にはサンフランシスコの講和会議があって講和が成立した。日本も、ここで、新しい時代に移り、ミス・モークも、その生涯の輝かしいフィナーレに入ることになったのである。

聖徒の書簡

ここで、ミス・モークが、日本から米国の教会に対して書いた手紙、また、友人や家族に書いた手紙がどんなものであったかを記すこととする。...

1948年5月28日付け手紙「お友だちよ」

「あなたがたの小包はつきました。そして品物は、すでに、これを必要とする家々におわかちしました。子供たちへの食料を受けた時の、お母さんがたの顔にあらわれる喜びと感謝を、あなたがたにもおみせしたい。これをおくって下さったあなたがたの努力は十分に報いられて余りがあると感じなさるでしょう。」当時は日本は食糧難だった。

この手紙より少し前の4月にも「友だちへ」との見出しで、「本所教会の若いお母さんが3カ月の赤ん坊を背にしてきましたが、栄養失調で泣いてばかりいました。1週に一度、ミルクのためにくるようになりましたが、ついに赤ん坊は元気になり笑うようになり、赤いバラの花のような頬になりました」と書いている。こうして窮乏の日本のためにいっしょうけんめい、故国に向かって訴えたのである。

1948年7月7日付け手紙「お友だちたちへ」

「わたしのアルミニウムの家がとどきました。出来るだけこれを早く建てるために、日本人の請負人と、今日は会います。小石川もとの土地へ、どんなに帰りたく願ってきたことでしょう。お察し下さい。この土地は、あの1941年9月の記念すべき日、(その日は、突然、抑留所入りをしたのです。)その日まで、日本におけるわたしの28年間の宣教師生活を送ったところです。その敷地は、わたしたちの大きな教会堂、幼稚園、聖書学校、宣教ホームなどの焼跡です。そこはまた私たちの宣教生活の初期わたしと一緒に生活した昔の宣教師たちの聖なる記念のところです。そこには、すでに、クオンセット・ハットが建てられ、毎日曜、いっぱいの人であふれています。」

1949年2月の「友だちたちへ」

「東京から御挨拶申し上げます。たしかに、あなたがたのお心とお祈りはキリストの御国の働きにおいて、わたしたちと、日毎に結ばれています。わたしたち E U B 教会の宣教師たちは、アメリカにあるあなたがたが、困難な骨の折れる時代のわたしたちの働きのため、喜んで愛の贈り物をして下さってわたしたちを後援して下さいることを、どんなにか誇りに思っています。」とある。まことにパウロの書翰を読むようである。「...わたしたちの青年たちは、日曜学校で 250 人以上の子供たちを教えています。彼らは最もつらい状態のもとで、すなわち、教師をとりまく一群の生徒たちの中に立って、戸外で教えるのです。」

1949 年 3 月 3 日付け手紙

「再び、春が、もうそこに来ました。あたたかい日々をどんなに待ちわびることでしょう。何百万と数知れぬ人は、家の中に燃料なく、夜をあたためる寝具も十分ではありません。日中とて身体をあたためる衣服にもこと欠く状態です。ですから太陽が毎日輝いて、この人達をあたためるのを、わたしたちは喜んでいます。朝 8 時前に、学校(註 ロゴス英語学校であろう)へ教えに行くときたくさんのお母さんたち、また、おばあさんたちが子供たちを背におって、セメント壁の南側に立っているのをみます。太陽の光で温めたいからでしょう。子供たちもそれを喜んでいます。彼らは通りゆく人を見つめています。しかしお母さんたち、またはおばあさんたちは、大変疲れているに違いないと、わたしは、しばしば考えます。」筆者も、こういう光景を想起する。ミス・モークの心は、これを見てどんなに心を傷めたことであろう。現在の日本は、もうこんなことを忘れてしまったかもしれないが、忘れてはならないことであろう。

1948 年 4 月 24 日付手紙

「わたしは 9 日間、入院しました。(眼の)いたみがはげしく、多くの日本人も、こういう時には失明するので心配でした。...神さまはよきお方でした。教会と友達の祈りに答えてくださいました。そしてイースター前の金曜日に退院することができました。わたしもま

た復活したかのごとく感じました。このイースターは大きな深い意味をもちます。「彼はここにおられない、よみがえられたのだ」(ルカ 24 / 6) とは重大な意味の言葉です。あの日、死は征服されたのです。イエス御自身のためのみならず、あなたとわたしのためです。わたしたちは、キリストを通してわたしたちがもっている驚くべき賜物(永遠の生命)を理解できないでしょう。そして多くのひとはそれを求めようとしません。人々は、滅びることのない生命、霊的の生命よりも、邪魔な、罪の生活そして物質的生命、世俗的生活を選びとります。しかし、わたしたちは、キリストと上なる生命に、他のすべてにまさって、ぴったりとつきましょ。そしてこのキリストに在る生命を他の人にもおわかちしようではありませんか。私の好きな聖書の句、ヨハネによる福音書 14 章 1-12 を読んでください。」

これはキリストにある聖徒の手紙である。このような気品の高い、それでいてわれわれの日常と密接につながっている手紙が、なお、たくさん残されている。これを書簡文学としてみても非常に価値のあるものである。しかし、何よりも、手紙の中に溢れているのはキリストへの愛と、人々の魂を思う熱情である。彼女はまさに聖書の示す標準の宣教師であったといえる。

1950年12月25日付け手紙

「昨日、この教会(スザン・バーンファインド・メモリアル・チャーチは、いま、建築中)では、86人のバプテスマがあり、400人の人々が会堂に、プラットフォームのうしろの室に溢れました。そして溢れた人は窓という窓の外に雲集しました。みんな救い主を知る喜びに満たされました。日曜学校のクリスマスは明日ですが、500人の子供たちが、また、いっぱいになることでしょう。私が日曜の夜いている本所の教会でも、昨日20人がバプテスマをうけました。」

前にも申し述べたように、この時代は、異常ともいえるような空気が日本中に満ちていたときで、全国の教会は、同じような光景を示したものである。これはやがて下降状態にはいったのであるが、

この上昇状況を、ただ冷たく眺めているミス・モークではなかった。彼女は、すべてのことに感謝し、働ける時には出来るだけ働け、と割り切っていた。いやそれ以上に、今は聖霊の働きの著しい時なのだ、と、彼女は信じた。いくら人間が希望しても、聖霊の働きがなければこういうことはあり得ないと、彼女は疑わず信じた。

1951年1月15日付手紙

「すべての教会で、異常な数の受洗者がありました。これは聖霊の不思議な働きが続いていることを示します。これはキリストの再臨が近いからでしょう。」と書いている。彼女は本当にそう信じたのである。

彼女の手紙が米国の教会に大きな影響を与え、米国の教会から当時の日本の諸教会や神学生たちへ多くの援助の手がさしのべられたことは事実である。がしかし、彼女は受けるだけでない、米国の教会に対して与える人であった。彼女のどの手紙をみても、福音のあかしと福音の喜びを語らないで終わっているものはない。

記念館

ミス・モークの日本においての年代順に見たクライマックス(頂点)は、小石川白山教会の献堂式であったとみてさしつかえなからう。霊的な意味でのクライマックスは、また別にあった。...教会は、ついに本会堂を与えられたが、日曜学校の生徒は依然として多くの分級のため教室を必要とした。そして、この年(1952年)の1月20日の長老会では、教育館の建設を決定した。長老会では、この建物はミス・モーク記念館と称することを申し合わせた。このミス・モークの名を冠する建物ということには、ミス・モークは気乗り薄だったということは言うまでもない。だが、ミセス・メッサ シュミットから「ローラ・モーク・ホール」と呼んだらどうかといってくるに及んで、ついに、このように呼ぶことを承知した。

(1952年)11月9日(日)午後2時よりローラ・モーク・ホールの献堂式を無事執行した。

1953 年を迎えると、この年は、ミス・モークが、いよいよ定年隠退をする年になった。

ミス・モークは 39 年勤めたことになる。なお来たるべき年 1 年、米国にあって現役として奉仕し、正式に隠退となるのである。この正式書簡が来て後、ミス・モークの心も平静になって、後仕事にとりかかることになった。教会員一同は、思いがけない発表に驚く。ミス・モークは後任としてミス・エルマーを紹介した。

小石川白山教会は、深甚の感謝を表明することとなって、教会総会において感謝決議をした。...

「われらはエバンゼリカル・ユナイテッド・プレスレン教会より派遣せられ、日本伝道ことに日本基督教団小石川白山教会のため、1914 年 12 月来朝以来、39 年間実に、忠実なるキリストの僕として神の福音を伝えたるローラ・ジョセフィン・モーク先生に対し、深甚なる感謝を表し、今後永く同先生の愛と祈りとを記念す。

右決議する。

昭和 28 年 4 月 26 日

日本基督教団小石川白山教会

昭和 28 年度定期教会総会

この年の 6 月 2 日、もう帰国の日の近い時、日本政府はミス・モークに対し勲 5 等瑞宝章を贈るとのしらせが、文部省の内藤誉三郎よりあった。...

6 月 7 日はミス・モークのための送別礼拝が小石川白山教会で催された。来者 350 名。

ミス・モークの船の出航は、7 月 26 日（金）となった。横浜埠頭へ行く。正午、ローラ・マースク号に乗り込んだ。しかし船はなかなか出ない。岸壁で祈祷会をもつ。見送り人は 200 人から 300 人の間であった。出航は夜の 8 時になった。名残り惜しい別れがいつまでも繰り広げられた。ラジオ東京、NHK、などミス・モークのことを放送した。朝日、毎日、産経等の新聞紙はミス・モークの記事を載せた。

その後のことども

ミス・モークは自分の名で大事業を残すというような考えは毛頭なかった。自分の仕事が芸術だなどとも考えなかった。近代機械工業の中で働く人は、毎日、小部品を操作する機械の一部分でしかないが、ミス・モークは、そういう単調な仕事であってもよい、神とともに働ける喜びを感謝した人である。事の結末まで見なくてもよい、その途中の一部分にたずさわったことだけで感謝した。しかし、神は彼女によき結末をさえ見せてくださったのである。彼女の仕事が大建築であったこと、大芸術であったことを見せて下さった。

思い出のハイ・ライト

1954年10月20日、カナダ・オンタリオ州キッチナーでの婦人伝道会第1日。会場はザイオン・チャーチ。ミス・モークたちと（藤田昌直牧師は）一緒に出かけた。ミス・モークとこうして行をともにするのは、全く、久しぶりだ。教会入口は人でいっぱい。大会堂である。この教会は会員数1万1千人。...

大会3日目の夜は大宴会であった。これは親睦の時でもあり、また「4年ごとの大会に引退した宣教師の栄誉をたたえて」の時でもあった。ミス・モークは過ぐる1年間の米国での巡回伝道を終えて、この機会に、正式に、40年の宣教師生活から引退するのである。...

食事が終わると、司会者は、各隠退宣教師に、5分間ずつ、その生涯のハイ・ライト（強い光をうけた最も精彩に富む場面）を語るようにと求めた。語った人は、全部で10数名であって一人々々まことに偉大な物語りであった。...

ミス・モークは、あの小さい身体をやおら起して次のように語った。

「わたしが東京で抑留所にいた時のことです。日本が降伏したことを知りました。その時、わたしたちの抑留所内には一つの流言・飛語が起こりました。長い戦争のあとですから、みんな精神も肉体も疲れていたのでしょう。抑留所にいるものは、明日はみんな銃殺さ

れるといううわさです。その晩うす暗い電灯の抑留所はいやな空気でした。私も長い戦いのあとで、さすがにこわい思いが起こりました。これが私の実際の姿でした。そういう状態の時、がらんとした室の一隅に一人の男の人が立っていました。婦人ばかりのはずの、この抑留所に男の人がいるとは考えられないことです。さすがに私はギョッとしました。

その男の人はうなだれていましたが、やがて顔をあげて自分の方をみつめました。わたしは、その人が主イエスであることを認めました。彼の眼はわたしの眼の中にきました。そこでわたしは言いました。

「どうぞわたしから眼を離さないでください」と。

すると主イエスは

「いいえ、あなたが、眼をわたしから離さなければよいのだよ」
(No! Just keep your eyes on me.)と言われた。今日も、主イエスの言われた言葉を、だいじに心にもっています。今日の時代は悪い時代です。今もって何が起こるかわかりません。しかしわたしたちの眼をイエスにつけていようではありませんか。(Let us keep our eyes on Him!)わたしは隠退しますが、誰もわたしの仕事を止めることはできません。働けるだけ、わたしは働き続けます。(Nobody can stop my work. I continue to work.)」

以上がその時の言葉の大要である。筆者は当時の日記帳に大急ぎで書きつけているので、ほとんど原文に近いと自信を持っている。まさに使徒行伝のパウロの伝道旅行の一節を読むようである。公生涯最後の晴の舞台上で語ったミス・モークの言葉に偽りはない筈だ。してみると、主イエスは、実に、ミス・モークにほんとうにあらわれ給うたのではないか。これが彼女のハイライトであるという。ミス・モークの真面目が躍如としている。ミス・モークにとっては、爆撃下のスリルも、勲章の榮譽も、主イエスに直面する光栄に比べるなら、もののかずではなかったのである。筆者は、ミス・モークが、ほんとうの聖徒であることをしみじみと知った。

フィナーレ

ミス・モークの臨終のことは、イーニッド教会の牧師夫人の便りによってつまびらかである。ミス・モークの主治医はドクター・ホープ・ロスというイーニッドにいる女医師であった。その助言でイーニッドの聖マリア病院へ入院した。しかし、彼女は、日本で病院に入っているような錯覚を起こしていた。イーニッドのFUB教会のミラー牧師が訪ねると、

「アメリカの牧師と牧師夫人のお見舞いを受けてうれしい」

と言ったりした。ミラー夫人も「日本の病院にいる思いだったのでしよう」と書いている。それが最後になった病床での撮影もアメリカの牧師と一緒にとられる光栄を感じて喜んだ。そして、1962年(昭和37年)9月18日午前3時、静かに天に召されたのである。76才、神のしもめは、待ち望んだ主のみもとへはべることとなった。イーニッドの教会と東京とで、それぞれ盛大な葬儀が執行された。東京では小石川白山、本所緑星、板橋その他教会及び日本聖書神学校においてであった。

ミスモークの信仰はまさにドイツ敬虔派の流れをくんだ福音主義的神学を基準としていた。それは神の主権と強いキリスト論的救拯と聖霊の導きへの信頼に重点を置いていた。ことに彼女の終末観は輪郭がくっきりしていた。彼女のキリスト再臨信仰をききつつ、目を丸くする青年たちも少なくなかった。しかし、ミス・モークは神学者ではなかった。彼女は自らの属する教会の信仰の中に、生まれた時から死ぬまで安心して身を委ね、純粹な信仰、単純な信仰をもって生きぬいたのである。...

彼女の愛もまた同じである。人は彼女を愛の人と呼ぶ。まさにその通りである。しかし彼女はそういう風に聖化されたのである。聖霊のわざである。彼女がキリストとの祈りによる密着を深めたために起こった事実である。

ミス・モークは、終始、キリストの教会との結合を全うした。講

壇に立っての礼拝説教はしなかったが、いつも、最前列に座を占めて、敬虔に礼拝を守った。

古い兄弟姉妹たちが、教会とのつながりを回復しつつあることは、そういう意味で感謝に堪えない。思うに、ミス・モークは、キリストを信ずる信仰のゆえに常に喜び常に新らしかった。あたかも無限の蜜月旅行をしていたかのような。苦しみにも悲しみにも、主イエスこそ常に彼女とともに常に在し給うたからである。われらのミス・モークは、ついにわれわれが、ミス・モークをも見失って、われわれがただキリストを仰ぐものとなることを、どんなにか祈っておられることであろう。

以上で歴史の項を終る。

藤田昌直記